

企業博物館 「エーザイ 内藤記念くすり博物館」

■エーザイ 内藤記念くすり博物館

○目次

施設概要

1. 施設設立の経緯
2. 現況
 - 1) 来場者数
 - 2) 来館者プロフィール
3. 展示
4. 運営
 - 1) 入場無料
 - 2) 「友の会」組織
 - 3) 企画展
 - 4) ネットの活用
5. 集客
6. インプレッション
 - 1) 1階ロビー
 - 2) 常設展示
 - 3) 企画展
 - 4) 本館／図書室
 - 5) 薬草園
 - 6) その他
7. まとめ

○施設概要

所在地：岐阜県羽島郡川島町竹早町1

電話：0586-89-2101

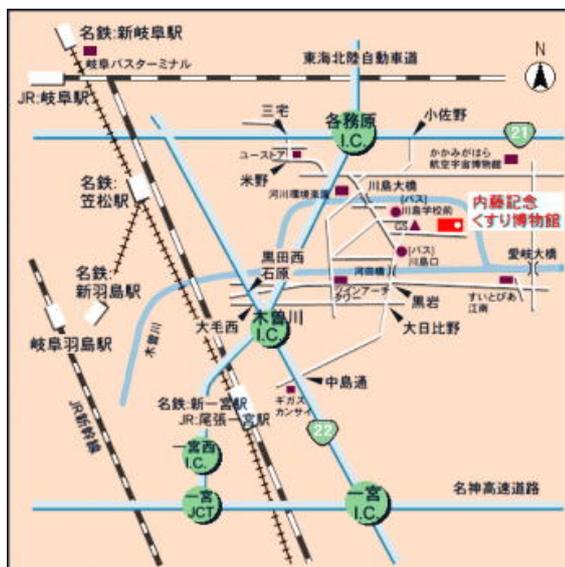
開館時間：9:00～16:00

休館日：月曜日、年末年始（12/28～1/8）

交通：JR岐阜駅から岐阜バスで40分、東海北陸自動車道各務原I.C./木曾川I.C.から車で9km（15分）、名神高速道路一宮I.C.から車で12km（35分）

入場料：無料

URL：<http://www.eisai.co.jp/museum/index.html>



1. 施設設立の経緯

この「内藤記念くすり博物館」が開館した当時、日本は高度成長期にあり、古い建物が壊され、新しい建造物が続々と建てられていた時期であった。薬業に関しても、古い店舗は建て直され、看板や製薬道具など価値ある資料が散失、または廃棄などの憂き目に遭っていた。貴重な資料を保存しなくては取り返しが付かないとの危惧から、博物館の設立となったのである。つまり、国から補助が出た、予算が付

いた、といった経緯ではなく、「薬学・薬業の発展を伝える貴重な史資料が失われ、後世に悔いを残すおそれがある」と考え、その保存・管理をするという発想のもとに建てられたのである。

エーザイ株式会社の前身である日本衛材株式会社は、埼玉県本庄町に1941（昭和16年）年に設立された、製薬会社としては比較的新しい企業である。1955（昭和30年）年、企業名を「エーザイ」と変更した。当時はカタカナの企業名は珍しく、内藤豊次氏の斬新な発想がここにも発揮されている。

創業の地ではなく、岐阜県川島町に設立されたのはもともとこの場所に工場（現も操業中）があり、建設できる土地が十分にあったことにより選ばれた。工場が開業した当時は、従業員の研修施設を兼ねたホール、会議室の併設を考えていただけで、博物館の設立は全く計画されていなかったという。

2. 現況

1) 来場者数

当館は2002年12月、来館者100万人を突破した。開館から31年目での100万人、と聞くと少ないと感じられるかも知れないが、「薬」のみを扱った博物館で、しかも集客に利便な場所とは言い難い環境で、これだけの集客を果たしていることは評価されるべきであろう。

ただ、残念ながらピーク時よりは減少しており、ピーク時には年間5万5,000人をカウントしたこともあったが、2001年度は約4万人であった。しかし、他で多く見られる例のように、オープン時にどっと入場しても翌年から急激に落ちる、といったオープニング効果に依存した状況ではない。徐々に増えて、新館の増設にともない、そのスピードも大きくアップしたという。こうして、現在はほぼ4万人前後で安定して推移している。

2) 来館者プロフィール

大勢を占めるのは団体である。医薬関連団体の研修に利用される例も多く見られるという。また老人会、婦人会、農協等がバスをチャーターして訪れる数も多い。平日は団体が中心だが、休日はマイカー利用の家族連れ、岐阜観光の途中に立ち寄る、といった個人客が多数となる。その他、春・秋には学生の遠足にも利用されている。

3. 展示

保存・展示されている資料は約50,000点、図書は55,000点にもものぼる。よくある先代や創業者の"コレクション"ではなく、全て日本全国から寄贈、寄託で集まったものであり、現在でも増え続けている。

従って、収蔵されているのは、実際に使われてきた道具や歴史資料類がほとんどである。それらは文化、歴史、そして情報を持って今でも発信しているのである。よく「博物館では何が目玉ですか」と聞かれるそうだが、所蔵数の規模自体が目玉だと考えている。どんなにマニアックな内容であったとしても、これだけの数が揃っていれば必要とする情報を初剣で切る。そこにこの博物館の価値がある、と考えている。実際、テーマ毎に体系的な資料分析が可能となっており、研究者からは貴重な施設として評価を受けている。

次へ 



■エーザイ 内藤記念くすり博物館

4. 運営

1) 入場無料

入場料は全く徴収していない。これは創業者・内藤豊次氏の「無料で広く一般に開放したい」という意向によるものである。入場料収入によって施設経営を行っているのではなく、あくまでも社会貢献という位置づけである。もし少額でも徴収したとしても、有料にした分のサービス充実のためにスタッフの配置が必要になり、収入増につながるとは考えにくい。入場料の徴収がすぐに利益となるほど甘くはない。

2) 「友の会」組織

くすり博物館では、毎年「薬草栽培教室」を開催している。参加者は30人前後で、近隣に居住している人が大半だが、中には岐阜や名古屋など遠方から参加している人もいるという。その他に「植物画」の教室もある。

これらの教室の卒業生により組織されているのが「友の会」である。現在登録されている人数は約100人。4つのグループに分かれて館内でボランティア活動等を行っている。活動は「花壇作り」「草取り」などのほか、イベント時には手伝ってもらうこともある。もちろん、館側から依頼することは少なく、グループ独自の自発的な活動が中心となっている。

この他に、別の組織で解説ボランティアもいるようで、博物館を愛する人々に支えられていることが実感できるという。

3) 企画展

常設展の他に、企画展を毎年1つのテーマを設けて開催している。企画は内部の学芸員によるオリジナルである。同館の3人の学芸員が交代で企画を立てている。常設展では展示できる数や内容に限られるため、企画展で収蔵物を展示する機会を作っている。そこで、常設では展示が作りにくいテーマを考え、体系づけて展示する。多数の収蔵によって、まず他の施設から展示物を借りてくることはない。

企画展の開催により、リピーターや新たな来館者の開拓が可能となっている。毎年違ったテーマであるため、毎年来る熱心なファンも増えている。また、2002年度には「鍼のひびき 灸のぬくもり-癒しの歴史-」展が開催されたが、その際には鍼灸学校や盲学校からの来館が多く、また業界紙にも取り上げられるなど、薬業とは縁遠いような人々へのアピールも忘れていない。

なお、2001年度の企画展は「はやり病の文化誌-麻疹・疱疹・コレラ-」、2000年度は「女・こども・男のくすり」、1999年度は「薬の神様・神農さんの贈り物-本草の世界をみつめる-」と、毎回興味深いテーマである。

2001年度の企画展「はやり病の文化誌-麻疹・疱疹・コレラ-」は、江戸時代から明治時代にかけての主な流行病（天然痘、麻疹、コレラ）を取り上げ、錦絵の展示を行った。「病」はなかなかメインテーマにしにくい。だが、人類は病気との闘いの歴史を歩んできており、「薬」と「病」は「医」の文化を創ってきた対抗要素である。その時代ごとの道具や病に関する絵画を見れば、病についての捉え方、向き合い方、考え方を理解できる。日本では「錦絵」を研究することで、日本独特の病の考え方、さらに当時の文化そのものを理解できるという。合わせて、収蔵資料集「はやり病の錦絵」も刊行された。こうして、毎年行われる企画展に合わせて資



「ホームページのご案内」チラシ (表)



「ホームページのご案内」チラシ (裏)

5. 集客

数多くの来館者を集めることは、民間事業者として無視はできないが、第一義ではない。入館料が無料とはいえ、来館するには交通費も時間もかかる場所に立地しているため、集客に注力したところでそれほどの数は望めないという現実もある。だが、逆にPRしなくても目的を持って、来館したいと思っている人にわざわざ来ていただいているという自負もある。それは常設展はもちろんのこと、人々の興味を引くオリジナル企画展の開催、夏休み親子教室の実施、講演会の開催など、充実したイベントの提供にも反映されている。

そのため、いわゆるPR活動に匹敵するものはホームページ「内藤記念くすりの博物館」だけである。その他にはイベント時には情報誌にデータを掲載することもある。また、企画展の内容が地元の新聞やテレビ番組に取り上げられることもあり、これには大きな宣伝効果がある。

また、観光ツアーの一環に組み込まれることもあるが、特に旅行会社へ働きかけなどの誘客は行っていない。

次へ 



空間
通信
トップ

企業博物館 「エーザイ 内藤記念くすり博物館」

■エーザイ 内藤記念くすり博物館

6. インプレッション

車で正門から博物館の敷地に入ると、赤い大きな屋根が見えてきた。よく晴れた朝で、芝生の緑やハーブ園と思われる植え込みの緑がまぶしい。駐車場に車を止めると、温室の前を通過して博物館へ向かう。展示館の建物も通り過ぎて、大きな屋根の本館の入り口から中に入った。



大きな屋根が特徴的な外観

1) 1階ロビー

中に入ると少し薄暗い、広いロビーとなっている。入ってすぐ左手に受け付けカウンターがあり、壁には薬の看板が数多く架かっていた。「龍角散」といった現代でもお馴染みの薬もあるが、漢字がたくさん並び、古くて遠目ではなんと書いてあるのかわからないような看板が多いが、どれも相当の時間を経たものであることが一目でわかる。



ロビーには壁にかかった薬の看板が

右手にはベンチとテーブル、そして大きなヤカンが1つ置かれていた。後からわかったのだが、このヤカンの中には薬草を煎じたお茶が入っていたのだ。ここではベンチに座ってのんびりとこの薬草茶を味わうという配慮である。



ヤカンに入った薬草を飲みながらくつろぐ来館者

奥には木製の、一見すると水車のような大きな輪が置かれていた。これは「人車製薬機」と呼ばれる、江戸時代に薬を作る際に使われた機械の複製であった。説明によると、大きな輪の中に2人入って足踏みをして回すと、連動して石臼が回って薬草を粉にする仕組みである。この装置は江戸・大阪・滋賀県の梅ノ木の薬屋で使われていて評判だったという。見学者が輪の中に入って足踏みの体験もできるようになっている。脇にあるボタンを押すと、モーターが動き出し、直径3mはある大きな輪がゆっくりとゴロゴロと音を立てて回り出す。見学者の体験のためにモーターを付けて、大きな輪でもそれほど苦もなく回せるようにしている。輪が回ると石臼もごりごりと音を立てて回り出した。もちろん、当時はモーターなどなく、苦勞して人力で回していたのである。



ゴロゴロと音を立てて回る「人車製薬機」

まだ入口ロビーなのに、薬草入りのヤカンや「人車製薬機」でこの施設にすっかり心を奪われ、展示に期待を抱いて常設展示、企画展示へと進む。

■エーザイ 内藤記念くすり博物館

6. インプレッション

2) 常設展示

常設展は主に医薬の歴史に沿った時系列でさまざまな資料が展示されている。細い通路を抜けて展示室へ入る。通路には古来より薬として利用されてきた植物などが壁面に美しくレイアウトされていた。よく見ると薬草として有名なゲンノショウコといったものから、アサガオ、ヒガンバナなど、ここに来るまで薬になるとは知らなかった馴染みのある植物に混じって、セミの抜け殻やタツノオトシゴも展示されていた。植物は薬としてわりとすんなりと受け入れられるが、セミの抜け殻となると服用するには勇気が要る。どんな効用があるのか興味深い。



後ろから光を当てて美しくレイアウトした薬の素材たち。セミの抜け殻も薬である。

展示室は壁面をガラスケースの展示スペースとしている。背景を白に統一、装飾は少なく非常にすっきりとシンプルな作りである。

「健康への祈り」と題したコーナーは、病の原因を精霊や悪魔の仕業と考えた人々が治癒のために神仏に祈りを捧げる際に使用した、様々な道具が展示されている。魔よけの置物、仏像、お札、風車、祇園祭りのちまき、などである。一昔前まではどこの家庭にもあった懐かしい道具である。また、「神農」と呼ばれる古代中国の薬祖神の像や掛け軸もある。頭に短い角のような角が生えていて、手に植物を持った老人の姿をしている神農は「野山をかけめぐり草木をなめて、薬になるか毒になるかを人々に教えた」（解説より）、ありがたい神様で、漢方医や薬屋の信仰を集めてきた。



簡潔にまとめられた解説

続いて「生薬」展示コーナーは大小さまざまなガラス瓶が並んでいる。乾燥したもの、ホルマリン等の液体の中に沈んでいるもの、形状的に丸いもの、長細いものなど、どれも生々しい様相を見せている。現代では病院で処方される薬もドラッグストアで買う薬も、原材料がどんなものかまるで見当が付かないものがほとんどだが、少し前まで、薬ははっきりとした原型を持っていたのだと実感できた。



パネル類などを極力排し、資料が引き立つ展示

生薬の見せ方についてだが、中身を見やすくするには丸いガラス瓶ではなく、トレーなどの上に乗せたほうがわかりやすい。だが、個人的には医療用のガラス瓶に入っていることにより薬としてのリアリティが増す、良い"演出"と感じた。

生薬のコーナーだけでなく、展示は全体的に



生薬はガラス瓶に入れて“リアル”に展示

非常にシンプルである。色を多用することなく、基本的には白地の紙に黒い文字が印刷されているのみ、図解も一つの色で表現されているものが多い。これらは全て学芸員のオリジナル造作である。

奥に進むと、明治中期の頃の様子を復元した薬屋の店先がある。木造の店舗で柱や壁が黒光りし、大きな看板の金色がよく映える。薬屋の看板には金箔を使った豪華なものが多かったそうで、他に展示してあった看板もその多くが金箔をほどこしてあった。そして金色の看板と同じく目立つのが、軒先に吊された「袋看板」と呼ばれる紙で作られた看板である。高さ90センチもある大きなもので、墨で大きく「薬種」と書かれている。上部がすばまった台形をしているのは、薬袋をかたどっているためである。この独特の形のため、一目で薬屋だと判別できたという。

その他、「蘭方医学の伝来」「富山のくすり（配置売薬の歴史）」「薬を作る」「病原菌との戦い」などの展示コーナーが続いた。どれも当時の資料、道具などが並べられた正統的な展示方法である。杉田玄白等の手による、学校で必ず習う「解体新書」の現物や、幕末に書かれた解剖図などを目の当たりにし、また工夫された製薬道具の数々を見ると、長く、大変な苦勞の結果、現代の医療、薬学が成り立っていることを実感できる。江戸時代の薬売りを再現した等身大の人形が置かれていたのが数少ないエンターテイメント色のある展示だった。

2階は常設展示と企画展示がある。まず常設展示を見ていくことにする。

「大衆薬工業協会加盟各社の製品」コーナーでは、その名の通り、協会に加盟している製薬会社の主な製品がずらりと並べられている。半分程度は薬局の店頭でよく見かける薬や、テレビコマーシャルで見聞きしたことのあるお馴染みの製品であるが、聞いたことも見たこともない社名や製品も多々ある。普段見慣れているはずの薬でも、このような分類・展示の形で見たのはもちろん初めてで、大衆薬の多種多様さ、裾野の広さを再認識することとなった。ちなみに加盟企業は2003年4月1日現在で88社である。

その他、「江馬蘭齋の薬用風呂」と名付けられた、一人用のサウナのような木製の太い筒であるとか、大正時代の薬箱だとか、学術的なものばかりでなく、生活と結びついた薬に関するありとあらゆる資料が数多く展示されていて、次から次へと興味が尽きることがない。また、「カロリー計算コーナー」や自分の体力などを計測できる「体験・参加コーナー」も用意されていた。



明治中期の頃の様子を復元した薬屋の店先



すっきりシンプルな館内



大衆薬工業協会加盟各社の製品コーナー



江戸時代の薬売りを再現した等身大の人形



「カロリー計算コーナー」「体験・参加コーナー」で多くの人が健康チェック

3) 企画展

2階では企画展も開催されている。我々が伺った際には、「鍼のひびき 灸のぬくもり 一癒しの歴史」が行われていた。(2002年4月27日～11月24日)

東洋では鍼や灸を施すことによって、病を癒してきた3000年の歴史があり、人々は傷を負ったり痛みを覚えたときに、本能的にその部位に手を当てて押したり、もんだり、暖めたりしてきた。刺激しているうちに治ったという自然発生的な経験が積み重なり、経穴(ツボ)やそれを伝える経絡(けいらく)の理論が鍼灸学の長い歴史の中で継承されてきたという。長い歴史を持つ鍼灸に関する数々の資料を展示し、鍼灸学を知ってもらおうと同時に健康についても見つめ直すきっかけとなるのが今回の企画テーマである。

この企画展示の目玉と言えるのは、大変珍しい「経絡人形」「経絡図」だろう。ツボを学ぶために使われたもので、特に体中に点と点を結ぶ線が走る「経絡人形」は一度見ると忘れられなくなりそうな様相である。

そしてもう一つ、心を捉えたのは浮世絵である。女性が灸の暑さに耐えて顔をゆがめたり、手ぬぐいを嘯んだりしている。浮世絵に描かれている女性は大抵あまり表情を出していないものだが、さすがに灸を据えられている女性は辛そうで、そこが気の毒だがなんともユーモラスでさえある。浮世絵に描かれるほど灸が生活に密着していたと言えるだろう。



体中にツボの点と線が走る経絡人形



灸の暑さに耐える浮世絵の女性たち

[次へ](#) 



■エーザイ 内藤記念くすり博物館

6. インプレッション

4) 本館／図書室

本館の6階には、医学・薬学書を中心とした約5万点の蔵書を持つ図書室がある。閲覧・貸し出し・コピーサービスを行っている。それほど広いフロアではないが、棚には書籍が、ガラスの戸棚の中にはファイリングされた資料や、製本し直された古い書物などがぎっしりと収められている。もしこの施設がなかったら散逸してしまっていたかもしれない貴重な資料がこの場所に一同に集められているのである。

そのほか、本館には「エーザイパブリシティラウンジ」と名付けられたエーザイの社史や製品の紹介コーナーがある。



図書室には貴重な資料がぎっしり



社史コーナー

5) 薬草園

薬草・薬木を育成し、一般公開している植物園である。約600種類が育成されているという。我々が訪れた日は大変天気の良い日で、日の光を一杯に受けた薬草園は緑がまぶしかった。

ここにはウコン、オタネニンジン、ドクダミなど耳にしたことのある植物が植えられている。

4～11月の間、第一日曜日には「薬草観察会」を開催しており、だれでも自由に参加できる。また、薬草の栽培と利用を学ぶ「薬草栽培教室」を実施している。35名定員で、1年間のコースとなっている。その他、毎月第4土・日曜日に「植物画講座」を精密なペン画を描く講座を開催しており、多彩な催しが行われている。

また、2003年5月には「薬草園フェスタ」と題したイベントが開催された。自然工房では木の実や葉など植物を使って人形を作ったり、染物工房では葉の色をハンカチに染めたり、といった手作りイベントで大変にぎわった。その他、薬草を使ったクッキー等が食べられるティーコーナーや苗販売コーナー、クイズコーナーなど家族で参加できるイベントが行われた。



薬草園

6) その他

同館では痴ほう症に関する情報スペースを2003年2月末に開設した。エーザイ株式会社とファイザー製薬株式会社が運営しているホームページ「痴ほう症を、あきらめない」が閲覧できる情報端末を設置、症状や痴ほう症に早く気づくポイント、介護される方に便利な情報を見ることができる。また、痴ほう症について理解を深める映像が見られるDVDシアターを設置した。

7. まとめ

奇をてらわずまっすぐな視点で展示を行っている姿勢に共感を覚えた。大変充実した内容であり、その上入場無料で提供しているのだから、頭が下がる思いである。

同館は企業博物館の部類に入る。だが、他の企業博物館とは違い、企業のPRを目的としているのではなく、創業者の業績を称えるための施設でもない。「社史コーナー」もあるが、この施設に於いて重要なポジションではない。あくまでも資料の散逸を食い止め、文化的に価値ある資産を守り、開示するという本来の意味の博物館機能を全うしているところに、他の企業とは一線を画している。だから企業名の入らない「くすり博物館」なのである。

1日遊べて楽しく学べるエンターテインメント性の高い施設も存在価値はある。楽しんでるうちになんとなくいろんな知識が得られる、受け身の姿勢でも楽しめる施設である。だが同館のように、学術的で、資料性の高い、見る側にも学ぼうとする姿勢とある程度の知識が必要な、能動性を要求する施設も重要だろう。

[エーザイ「くすり博物館」Top](#) 

